



TITLE:

星の文藝欄

AUTHOR(S):

---

CITATION:

星の文藝欄. 天界 1935, 15(173): 437-438

ISSUE DATE:

1935-08-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/167089>

RIGHT:

★ 星 の 文 藝 欄 ★

「地獄におちた Orpheus」(煉獄篇)

嘗て青い森が一條の水に二分さるとき。  
 必ず一人の Orpheus 一人の Eurydie が相寄る。  
 御身は天上の詩……………。  
 あなた様は……………。  
 男はのみこみの早い無法者。そして  
 女の科白迄強奪する。

憂愁と安堵が、  
 恐怖と悦樂が、  
 同時に彼女の私生活を訪れてより。  
 Orpheus の豎琴の前で  
 女は微風の様にやさしく  
 墓石の様に不敵に合せ鏡を用ふる

月と烏を泣かしめた戀歌。  
 音楽博士は毎夜の音律を evaluate する。  
 Orpheus の情事と Octave の示性曲線。  
 足が出さうになつた音楽屋は周章絶叫する。  
 生活よりほどばしる感情描寫だと。  
 卑猥なエゴイズムの遁走曲。

屢々うら若い既婚婦人が獨身者でおられることがある。  
 Eurydice の森の散索もその牧夫には未婚婦人。  
 崇拜者の數と美の量。  
 そしてスタコラ逃げ出す芝居氣。

ホンの軽い火遊だのに。

冥府に迎へられなければならぬ花嫁。

今こそ Orpheus の藝術は至上。

かきならず弦は地上の悲しみ。

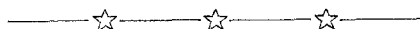
感傷ならず。

唯低く呻いてガバと俯す。

カルタゴ人も猫族も。

血を吐く想夫憐。

これは同情週間ではない筈。（此の篇ヲハリ）[京都・林]



## “星”

青く澄んだ空には

美しい星がびかびか輝いてゐる

あそこへわたしはこの唇をおしつけたい

さうして、はげしく泣いて見度い。

あの星はわたしの愛する人の眼だ

絶えず瞬き乍らかゞやいて

わたしにやさしく挨拶する

青く澄んだ大空から……………

（ハイネ——生田春月譯）

